

視察報告書

2018年4月17日 日本共産党流山市議団

小田桐 たかし

徳増 きよ子

●視察日

- ・4月13日（金曜日）午後3時～

●視察項目

- ・向小金児童センター（指定管理事業者の企画提案書と実際の運用状況）
- ・えどがわ学童クラブ（市内初の民設民営による学童保育の提供）

●感想

・児童センターは、以前から市内7カ所に整備され、地域における子育ての場、子どもたちに寄り添う場として子どもに関わる地域拠点の一つとなってきた。この間、公的部門の市場開放により指定管理制度を導入され、4カ所目となった向小金児童センターを視察した。

とりわけ、市場開放を人件費削減の柱に据えてきたが、保育士等の処遇改善が社会的な国民的要求なりつつあるもとの、指定管理事業者側から処遇の更なる改善や施設の老朽化に対する計画的修繕が提案されていたことから、実際の運用にあたり、事業者の企画提案書との差異及び取り組みを学ぶ機会とした。

実際の運用が4月1日以降ということもあり、日にち的にも引き続き、企画書と運用の差異等は注視しておく必要があるものの、職員6名中、正規職員が4名配置されていた。これは同事業者が指定管理者として運用している市内の他児童センターで正規職員が一人もいない施設もあり、予算委員会で指摘していた経緯もあることから、違いが見て取れた。ただし、非正規では時給が100円下がったという声も聞かれており、丁寧な聞き取りと調査が必要と感じた。

また当日、中学生らによる卓球や小学校低学年による遊びなどが拝見でき、ノビノビとした開放感が子ども達からも好意が持たれていることを実感できた。この背景には、市職員による粘り強い取り組みがあり、サービスメニューにはないが十分に引き継げる研修や情報交換が必要と感じた。

その他、施設の老朽化に対する修繕等が気になっていたが、遊戯室の床は固くすり切れたジュータンが柔らかいクッション材に変更され、壁やトイレのドアも指定管理導入前に改善されていることを確認した。一方、冷水器の新設など子どもたちの視点を生かした改善も必要と思われる。また、周辺の住宅新設に伴う対応（子どもの声は響きやすく、窓を閉め切っても響くなど）など他児童センターにはない地域性も考慮する必要性を感じられた。

・市内初の民設民営学童クラブということで、子どもの下校時から保護者への引き渡しなど一連の流れ、ハード・ソフト面での内容を学ぶ機会とした。

江戸川大学の一部を利用していることによる強みと課題があることを以下、実感した。

1、大学生が身近になることで、青年期のイメージがつきやすい。文化祭などへ地元少年野球チームが売店など参加していることを念頭に、学童クラブ利用児童・保護者らの交流の機会を設定しやすい。

2、広場等が独自に使い、外遊びの自由度が高められる。

3、小学生はまち探検、中学生は模試と江戸川大学が利用されており、「普通った学童」など郷土を意識する機会につなげられる。

4、5年毎に変わる指定管理ではないため、支援員等の継続性が担保しやすく、専門性を高めること、兄弟両方を見ることで、保護者との関係性を築きやすい。

5、学校とは離れ、市境に近い場所にはなるものの、都市計画道路の整備状況や、勤務先が近隣市の場合、通勤が車と想定すれば、利用しづらさは案外解消できることから、公設民営で漏れた子どもの受け皿的存在からの脱皮が図られ、公設民営でも、民設民営でも通う園によって劣等感を持つようなことが防止できる。

一方で、①教室のしつらえから子どもの目の高さに様々な角やドアノブがあり、安全チェックやクッション材の設置等検討する必要がある。②初めて40人を保育する1ルームの大きさを拝見したが、難しさを実感し、少なくとも25人程度にすべきと感じた。③戸建て式学童クラブ施設は、勉強やおやつスペースと、遊戯スペースをしつらえ等で変化をつけている。これは家庭的保育を意識した優れた設計であるが、床はやわらかい素材を使っているものの、1部屋＝教室では十分に反映できない。④家庭的保育をするためにも、壁紙や誕生日会の掲示などワクワク感や安心感をうむ内装への一工夫が必要。⑤急な発熱等への休憩室の確保。⑥最大40名×2となれば、28人用のバス1台では対応できないので、バス増便と人件費及び諸経費の増加を見込まなければならない。⑦いじりやけんか等日々変わる子どもたち同士のトラブルへの対応として学校、公設民営の指定管理事業者との連携に十分な時間をかけなければならない等の課題もあり、市担当課及び学校も含め日々改善が必要と思われた。

最後に、年度初めの忙しい時期にもかかわらず、ご対応いただき、熱心にご説明頂いた関係各位に感謝を申し上げ、報告書とする。